

保育科学生の施設実習における生活支援に関する 自己効力感と実習達成感との関連 — 障害系施設と養護系施設との比較を通して —

岡田 恵子

Relevance of Self-Efficacy for Well-being Support and Sense of Accomplishment after Practical Training at Social Welfare Facilities

Keiko OKADA

キーワード：生活支援，自己効力感，達成感，施設実習

概 要

本研究の目的は、保育科学生が福祉施設実習において施設利用児・者への生活支援を前向きに行なうことが、実習効果のひとつである実習達成感を高めることと関連しているか、またどのような生活支援内容が実習達成感と関連しているか検証することである。そのため学生の生活支援に関する自己効力感を実習前後で測定し、その変化と実習達成感との関連を把握することにした。実習施設や施設利用児・者の状態によって生活支援内容は異なるため、障害系施設と養護系施設に分け、これらの関連性を把握することにした。

その結果、障害系施設、養護系施設ともに学生の生活支援に関する自己効力感と実習達成感は関連がみられた。障害系施設では専門的支援、身体的支援、養護系施設では優しさ支援に特徴がみられた。兩種別で実習達成感と関連していた生活支援内容は尊重的支援であった。

今後、福祉施設実習で前向きに生活支援活動が行なえるよう事前に指導してゆくことが、実習効果である実習達成感の向上と関連し、必要なことが示唆された。

1. 緒 言

保育士養成において、保育実習は学生がそれまで習得した基礎的知識と技術を初めて学外で統合し実践応用することが求められる重要な科目である。そのひとつに児童福祉施設や知的障害者更生施設等（以下、施設と略す）における10日間の実習（以下、施設実習と略す）が組み込まれている。これらの実習施設では家庭での養育や生活が困難な利用児・者に対し、彼らの成長、発達、健全な人間形成をはかり生活の質（QOL）を高めることを目的に、個々の特性やニーズを理解し困難や障害を軽減、緩和、充足するための生活支援が行なわれている。これは施設における重要な支援であり、保育科学生の施設実習においても主要な実習内容とな

る。

保育科学生が施設実習で前向きに生活支援活動を行い、施設利用児・者への理解を深め生活支援の知識や技術を習得することは、保育士養成の上でも重要である。また学生が施設実習で前向きに生活支援活動を行うことは、保育実習での実習効果を高めることに関連すると思われる。実習効果を反映するひとつの指標として学生の実習後の達成感や満足感があげられる。実習達成感は、高橋¹⁾が述べているように、実習満足感と同様にその後の学習の動機づけに影響を与える重要な要素と考えられ、高まることが望ましい。そこで筆者は施設実習において、保育科学生が前向きな生活支援活動を行なうことが彼らの実習達成感を高めることと関連するのか、またどのような生活支援の内容が実習達成感の高まりと関連しているのか調査し、今後の指導に役立てたいと考えた。

本研究では保育科学生が前向きな生活支援ができることを、学生の生活支援に関する自己効力感が高い状

（平成20年10月15日受理）

川崎医療短期大学

Department of Nursing Childcare, Kawasaki College of Allied Health Professions

態として捉えることにした。自己効力感とは、「いま、そのことが自分にできるかどうか」という具体的な一つ一つの行為の遂行可能性の予測であり、ある状況において望ましい結果を引き出すための「達成や対処への可能性」²⁾である。自己効力感をどの程度持っているかがその個人の行動変容に大きく影響する²⁾ことから、生活支援に関する自己効力感が高いことが、施設実習における前向きな生活支援活動に直結すると考えた。

保育科学生の生活支援に関する自己効力感を測定するには尺度が必要である。しかし測定に用いることのできる尺度が見当たらなかったため、筆者は先行研究³⁾において、「福祉施設における生活支援自己効力感尺度」を作成した。今回はその尺度を用い、保育科学生の生活支援に関する自己効力感（以下、生活支援自己効力感と略す）を測定し、施設実習における実習効果の一指標である実習達成感との関連を検証することにした。

また本研究では保育科学生全体での検証とともに、実習施設を知的障害児施設、知的障害者更生施設、肢体不自由児施設、重症心身障害児施設（以下、障害系施設と略す）と乳児院、児童養護施設（以下、養護系施設と略す）の2種別に分け⁴⁾検証することにした。障害系施設は、心身の発達や機能に障害のある障害児・者のため治療や療育、訓練などの専門的ケアや日常生活の援助を行い、発達や自立的生活を支援する施設である。養護系施設は、親や家庭の養育環境に問題があり家庭での養育が困難なため受け入れる。そして家庭に代わる安定した生活の場を提供し、子どもの日常生活全般のケアにより健全な発達や自立を支援する施設である。これら施設種別によって生活支援の内容や対象者の状態は異なる。そのため2種別に分け、実習前後で生活支援自己効力感に変化はあったのか、実習による変化の状況をつかむことにした。次に実習後の生活支援に対する自己効力感の高さと学生の実習達成感は関連があるのか、さらにどのような生活支援内容が実習達成感と関連していたのかについても検証することにした。施設種別によって学生の実習自己効力感と実習達成感との関連がいかにより異なるのか明らかにすることは、今後の実習指導に役立つと考えた。

2. 方 法

1) 調査対象者・調査時期

調査対象者は、平成17年4月にK医療短期大学に入

学した保育科学生77名である。調査時期は、2年次の施設実習前の平成18年8月上旬と、施設実習後の平成18年9月下旬であった。これらの調査のいずれかを受けていなかった6名を除いた71名が有効回答者数（有効回答率92.2%）である。このうち障害系施設で実習を行なった学生は43名、養護系施設で実習を行なった学生は28名であった。

2) 調査内容と倫理的配慮

先行研究³⁾で作成した福祉施設における生活支援の内容として4因子18項目からなる生活支援自己効力感尺度を用い、施設実習前後で測定した。本尺度は専門的支援への自己効力感因子（専門的知識の上に立ち、個別ニーズに応じて支援を行なうことができる）、尊重的支援への自己効力感因子（施設利用児・者の人格を尊重し、あるがままの姿や気持ちを受け止めることができる）、優しさ支援への自己効力感因子（施設利用児・者に対し優しい気持ちをもって支援することができる）、身体的支援への自己効力感因子（施設利用児・者の身体的・生理的な欲求を充たすため、直接身体に触れ支援することができる）の4因子、それぞれ5項目、6項目、4項目、3項目から構成されている。質問項目についての回答は「自分がどのくらいできると思うか」と尋ね、「できないと思う」（1点）～「できると思う」（5点）の5件法とした。また実習達成感についての調査も行った。この回答も「ほとんどなかった」（1点）～「とてもあった」（5点）の5件法とした。

調査は、研究の趣旨に同意し協力の得られた保育科学生に、質問紙による一斉調査を行った。その際、個人のプライバシーが漏れることがないこと、研究目的以外には使用しないこと、回答は任意であることなどを伝え倫理的配慮に留意した。

3) 分析方法

- (1) 学生の実習前後の生活支援自己効力感の変化の状況を調べるため、学生全体と障害系施設、養護系施設ごとに実習前後の生活支援自己効力感総得点と4因子得点を算出し、t検定で比較した。
- (2) 学生の生活支援自己効力感と実習達成感は関連するのか調べるため、学生全体と障害系施設、養護系施設ごとに実習後の生活支援自己効力感総得点の平均値を出した。それを基準に得点が高い群をH群、低い群をL群として、2群で実習達成感に差があったのか、それぞれ検定で比較した。
- (3) 学生の生活支援自己効力感と実習達成感は関連

するのか調べるため、学生全体と障害系施設、養護系施設ごとに実習後の生活支援自己効力感総得点と実習達成感とのピアソンの相関係数を求めた。

- (4) 学生の実習達成感はどのような内容の生活支援と関連していたのか調べるため、学生全体と障害系施設、養護系施設ごとに実習後の生活支援自己効力感4因子得点を算出し、実習達成感とのピアソンの相関係数を求めた。

これらの統計処理は統計解析システムSPSS11.0Jを用いた。

3. 結 果

- 1) 学生全体、障害系施設、養護系施設における実習前後の生活支援自己効力感総得点と4因子得点の平均値(SD)は表1, 2, 3のようになった。学生全体では尊重的支援への自己効力感因子のみが向上し

表1 学生全体の実習前後の生活支援自己効力感

	施設実習前	施設実習後	実習前後の比較 t 値
	M (SD)	M (SD)	
総得点	3.95 (0.45)	4.05 (0.51)	1.87
専門的支援	3.85 (0.51)	3.91 (0.74)	0.85
尊重的支援	3.92 (0.54)	4.09 (0.63)	2.30*
優しさ支援	4.53 (0.41)	4.52 (0.57)	0.00
身体的支援	3.39 (0.69)	3.53 (1.03)	1.11
n = 71名			*p<0.05

表2 障害系施設での実習前後の生活支援自己効力感

	施設実習前	施設実習後	実習前後の比較 t 値
	M (SD)	M (SD)	
総得点	3.87 (0.45)	4.09 (0.54)	3.00**
専門的支援	3.76 (0.51)	3.89 (0.82)	1.35
尊重的支援	3.83 (0.56)	4.10 (0.66)	2.91**
優しさ支援	4.48 (0.43)	4.63 (0.46)	1.94
身体的支援	3.35 (0.58)	3.67 (1.01)	2.21*
n = 43名			**p<0.01, *p<0.05

表3 養護系施設での実習前後の生活支援自己効力感

	施設実習前	施設実習後	実習前後の比較 t 値
	M (SD)	M (SD)	
総得点	4.09 (0.54)	4.00 (0.48)	0.85
専門的支援	3.98 (0.48)	3.94 (0.60)	0.47
尊重的支援	4.07 (0.48)	4.09 (0.60)	0.19
優しさ支援	4.60 (0.39)	4.43 (0.66)	1.23
身体的支援	3.47 (0.83)	3.36 (0.98)	0.60
n = 28名			

ていた。障害系施設では総得点、尊重的支援、身体的支援への自己効力感が向上していた。養護系施設ではいずれの生活支援自己効力感も向上はなかった。

- 2) 学生全体、障害系施設、養護系施設における実習後の生活支援自己効力感総得点の平均値を算出すると、学生全体では4.05 (SD 0.51)、障害系施設では4.09 (SD 0.54)、養護系施設では4.00 (SD 0.48)であった。障害系施設、養護系施設で有意な差はなかった。これら総得点平均値を基準に得点が高い学生群をH群、低い学生群をL群とし、それぞれの実習達成感を比較した。その結果が表4である。学生全体、障害系施設では、H群の実習達成感が有意に高かったが、養護系施設では差はみられなかった。
- 3) 学生全体、障害系施設、養護系施設における実習達成感の平均値は表5のように、学生全体では4.31 (SD 0.86)、障害系施設では4.44 (SD 0.77)、養護系施設では4.11 (SD 0.96)であった。障害系施設、養護系施設で差はなかった。学生の生活支援自己効力感と実習達成感に関連するのかが検証するため、それぞれの実習後の生活支援自己効力感総得点と実習達成感とのピアソンの相関係数を求めた結果、表6のように学生全体では ($r=0.47, p<0.01$)、障害系施設では ($r=0.40, p<0.01$)、養護系施設では ($r=0.56, p<0.01$) で、いずれの生活支援自己効力感総得点と実習達成感も相関関係がみられた。
- 4) 学生の実習達成感はどのような内容の生活支援と関連していたのか調べるため、それぞれの実習後の生活支援自己効力感4因子得点と実習達成感とのピアソンの相関係数を求めた結果、表6のようになった。学生全体で実習達成感との相関がみられたのは、専門的支援 ($r=0.27, p<0.05$)、尊重的支援 ($r=0.44, p<0.01$)、優しさ支援 ($r=0.52, p<0.01$) への自己効力感であった。障害系施設では専門的支援 ($r=0.41, p<0.01$)、尊重的支援 ($r=0.44, p<0.01$) への自己効力感であった。養護系施設では尊重的支援 ($r=0.46, p<0.01$)、優しさ支援 ($r=0.82, p<0.01$)、への自己効力感であった。

4. 考 察

見出された結果をもとに、障害系施設と養護系施設に分け学生の生活支援自己効力感の実習前後の変化と実習達成感との関連について考察してゆきたい。

表4 生活支援自己効力感H・L群の実習達成感

	n	生活支援自己効力感	H群	L群	H・L群の比較 t値
		M (SD)	M (SD)	M (SD)	
学生全体	71	4.05(0.51)	4.69 (0.47)	3.94 (0.98)	4.03**
障害系施設	43	4.09(0.54)	4.77 (0.43)	4.10 (0.89)	3.21**
養護系施設	28	4.00(0.48)	4.35 (0.79)	3.73 (1.10)	1.76

**p<0.01

表5 障害系施設と養護系施設での実習達成感

	n	M	(SD)
学生全体	71	4.31	(0.86)
障害系施設	43	4.44	(0.77)
養護系施設	28	4.11	(0.96)

表6 実習後の生活支援自己効力感と実習達成感との相関係数

	学生全体 n=71	障害系施設 n=43	養護系施設 n=28
総得点	0.47**	0.40**	0.56**
専門的支援	0.27*	0.41**	0.09
尊重的支援	0.44**	0.44**	0.46**
優しさ支援	0.52**	0.14	0.82**
身体的支援	0.18	0.06	0.27

**p<0.01, *p<0.05

1) 障害系施設について

施設実習前後で尊重的支援と身体的支援の自己効力感が高くなっていった。このことから、障害系施設では、学生が保育所実習で体験した、子ども一人一人への温かく行き届いた心遣いなどが、障害児・者の気持ちを理解、尊重してかかわるなどの尊重的支援として生かされたと思われる。また障害系施設ならではの支援内容として、食事、排泄、衣服の着脱援助などの日常生活での生理的欲求を充足する身体的支援は不可欠であったと思われる。保育科学生がこれらの日ごろなじみのない支援に取り組み、実習後自己効力感が向上したことは大変望ましいと思われた。

学生の生活支援自己効力感総得点と実習達成感には相関関係がみられ、生活支援自己効力感H群とL群の実習達成感には有意な差があった。このことから、前向きな生活支援活動を行なった学生の実習達成感が高まること示された。実習達成感と関連のみられた生活支援内容は専門的支援と尊重的支援であった。専門的支援は、施設利用児・者一人一人のニーズを理解し、いかに個々に応じた支援をするかという個別性の理解が土台となる^{4,5)}。実習を通し、今まで体験がなかった

障害系施設ならではの個別ニーズや専門的知識、援助技術の理解がすすみ、日々援助を行なう中で、少しでも前向きに実践できるようになった学生の実習達成感が高まったと考えられる。また施設利用児・者一人一人をあるがまま共感的に受けとめ、彼らの気持ちになってかかわることのできた学生の実習達成感が高まったと考えられる。

障害系施設においては専門的支援や、身体的支援が重要であることが特徴として現れていた。施設利用児・者の人権が尊重され、専門的支援、身体的支援により生理的欲求や人格的・社会的欲求が満たされ発達の保障、自立支援がなされてこそ健全な人間形成が行なわれる。今後利用児・者にとってのこれらの支援の重要性を保育科学生にさらに指導し、共感的に理解させた上で施設実習に出すことが、さらに前向きな生活支援活動につながりより実習達成感を高めることになると思われた。

2) 養護系施設について

施設実習前後で生活支援自己効力感に差はみられなかった。このことは、養護系施設は普通の家庭生活に近い生活を提供することが目的であり⁶⁾、学生にとっては家庭の延長のような実習場所で、障害系施設のように日ごろ体験できない支援の実践を求められることもなかったと思われる。そのため日常生活全般の支援はあまり専門性のあるものと感じられず、実習後も生活支援自己効力感は特に高まらなかったと考えられる。また10日間の実習では、家庭環境や家族関係に問題があり養護系施設に入所している18歳までの子どもたちの気持ちをありのまま受けとめ、理解し、優しい気持ちでふれあうなどの支援は難しく、実習後も生活支援自己効力感は特に高まらなかったと思われる。

学生の生活支援自己効力感総得点と実習達成感には相関関係がみられ、養護系施設でも前向きな生活支援活動を行なった学生の実習達成感が高まること示された。実習達成感と関連のみられた生活支援内容は子どもへの尊重的支援と優しさ支援であった。これは子ども一人一人の気持ちを共感的に受けとめ、かかわることのできた学生や優しさをもち続けてかかわることのできた学生の実習達成感が高まったと考えられよう。養護系施設に入所する子どもたちの中には、人間関係の最も基本である親子関係の中で基本的信頼感が形成されていない子どもも多い⁶⁾。このような子ども

たちに必要なのは、職員との人間関係の中で安定して受け入れられ、基本的信頼感を構築し自尊心や主体性、意欲などを育てることである⁶⁾。そのためには子どもへの尊重的支援と優しさ支援は欠かすことができない。今回これらと実習達成感に関連がみられたのは、保育士の資質として望ましいと思われた。

養護系施設の子どもたちは、生活の場である施設で安定した生活を毎日繰り返し、経験を積み重ねることで生活技術や社会性を身につけ、健全に育ち自立する力を養っていく⁶⁾。すぐに結果は出ないが日常生活全般を子どもたちとともに展開し、子どもたちの生活を支えることの意味を共感的に理解させた上で、学生を施設実習に出すことが必要である。そうすることが今後、養護系施設でのさらに前向きな生活支援活動につながり、より実習達成感を高めることになると思われた。

3) 学生全体について

学生全体でみた場合、実習前後で高まっていたのは尊重的支援への自己効力感であった。また学生全体、障害系施設、養護系施設のいずれにも達成感との関連がみられたのは尊重的支援への自己効力感であった。尊重的支援は利用児・者との人間的なふれあいを大切にする支援である。生活支援においては利用児・者と関係をどのようにもてるかが、実習内容や成果に大きく影響する⁴⁾。さまざまな理由で施設入所する利用児・者が本当に欲しいのは心のこもった世話であり、心から休める場所と温かい目で常に見守っている人が

そこに存在するという実感である⁷⁾。かけがえのない人間として一人一人の尊厳を重んじ関わる受容や共感のあたたかい関係が彼らを支える。尊重的支援はこのような利用児・者とのよい関係を築く重要な支援と言える。尊重的支援と実習達成感に関連があったことは、保育科学生として望ましいことと思われた。今後尊重的支援がさらに前向きに実践できるような指導を行なうことで、学生の施設実習における実習達成感さらには高まると思われた。

4) ま と め

本研究の目的は、保育科学生が前向きな生活支援活動を行なうことが実習効果のひとつである実習達成感を高めることと関連するのか実証するため、学生の生活支援自己効力感を測定し、実習達成感との関連性を検証することであった。その結果、これらは関連があることが示された。学生の自己効力感と実習に関する研究で、奥津らは自己効力感と実習目標達成度には正の強い相関がある⁸⁾と報告している。本研究でも同様の結果が得られた。今後、施設実習で保育科学生がより前向きに生活支援活動ができるよう、得られた結果をもとに施設種別に応じた指導を行なうことが求められる。そうすることにより、保育科学生はさらに施設実習で施設利用児・者への理解を深め生活支援の知識や技術を習得し、実習効果は高まるであろう。このような指導は保育士養成の上でも重要であると思われる。

資料 福祉施設における生活支援自己効力感尺度

生活支援の内容	質問項目
専門的支援への自己効力感	利用者にあった生活支援を実施することができる。 基本的な生活支援を行うことができる。 利用者に必要な支援を考えることができる。 事故防止に注意することができる。 利用者のペースに合わせて行動する。
尊重的支援への自己効力感	利用者の言動に対して感情的に対応しない。 利用者のあるがままの姿を受けとめることができる。 利用者が好む話題を提供する。 利用者の気持ちになって考える。 先入観をもたずに利用者に接する。 利用者への接し方を振り返ることができる。
優しさ支援への自己効力感	利用者に優しい気持ちでふれ合うことができる。 利用者に対して優しい態度で接する。 利用者の目線に合わせて話をする。 利用者に接する機会を多くもつ。
身体的支援への自己効力感	利用者の排泄の支援ができる。 利用者の衣服の着脱の支援ができる。 利用者の食事の支援ができる。

5. 文 献

- 1) 高橋恵美子：小児看護実習における看護学生の満足感とその要因，鳥根県立看護短期大学紀要 8：61—68，2003.
- 2) 祐宗省三，原野広太郎，柏木恵子，春木 豊：社会的学習理論の新展開，初版，東京：金子書房，p.43, p.104, 1985.
- 3) 岡田恵子：福祉施設における生活支援自己効力感尺度の作成，川崎医療福祉学会誌18(1)：315—320，2008.
- 4) 民秋言，安藤和彦，米谷光弘，中山正雄編：保育ライブラリ 施設実習，初版，京都：北大路書房，p.18, p.37, p.40, 2004.
- 5) 小田兼三，石井 勲編：養護原理，第4版，京都：ミネルヴァ書房，p.8, p.9, p.83, 2006.
- 6) 愛知県保育実習連絡協議会，「福祉施設実習」編集委員会編：保育士をめざす人の福祉施設実習，第3版，岐阜：みらい，p.34, p.41, 2008.
- 7) 澤田信子，西村洋子編：新・社会福祉士養成テキストブック 介護概論，初版，京都：ミネルヴァ書房，p.43, 2007.
- 8) 奥津文子，片山由美，赤澤千春：効果的な臨地実習指導方法の検討Ⅱ — 学生の自己効力感と実習目標達成度との関連からの一考察 —，京都大学医療技術短期大学部紀要23：23—31，2003.